

A1 海域（有明海湾奥奥部）の問題点と原因・要因の考察

【有用二枚貝の減少】

1 タイラギ

① 現状と問題点の特定

A1 海域は沿岸域が水深の浅い干潟域であり、冬季はノリ漁場として利用されているため、潜水器漁業によるタイラギの漁獲は認められない。A1 海域の東部は砂質干潟で干潮時に広大な干潟が現われ、かつ人が歩けるため、採貝漁業者による「徒取り」漁業が営まれているが、長期的な統計的データがほとんど収集されておらず、漁獲量や資源量を正確に推定することは困難である。

A1 海域の干潟域については 1970 年代からの長期的データがなく、過去にもほとんど資源調査がなされておらず、変動要因について整理することは困難である。ここでは 2014 年に図 1 に示した A1 海域東部で行われたタイラギ資源調査結果を示す。

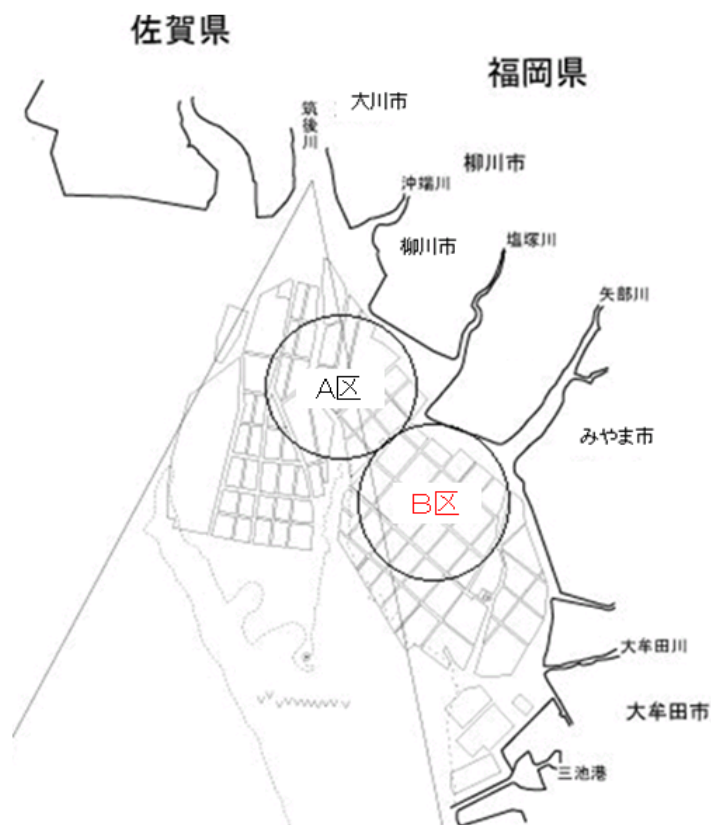


図 1 A1 海域東部におけるタイラギ資源調査地点

出典： 福岡県，佐賀県，長崎県，水産総合研究センター（2014）「平成 26 年度二枚貝資源緊急増殖対策事業成果報告書」

まとまった調査データはないものの、この海域の干潟域はかつてより天然タイラギが比較的生息している海域として知られている。現在においても、徒取り漁業が営まれている唯一の海域である。

2014年4月～12月の間に実施した計6回の干潟調査の結果を図2に示した。なお、徒取りでは漁獲サイズが殻長15cm以上のため、それ以下の稚貝サイズの分布については不明である。A区については、10～33個/30分の採捕数が得られた。B区では、30～57個/30分とA区より多くの親貝が採捕された。

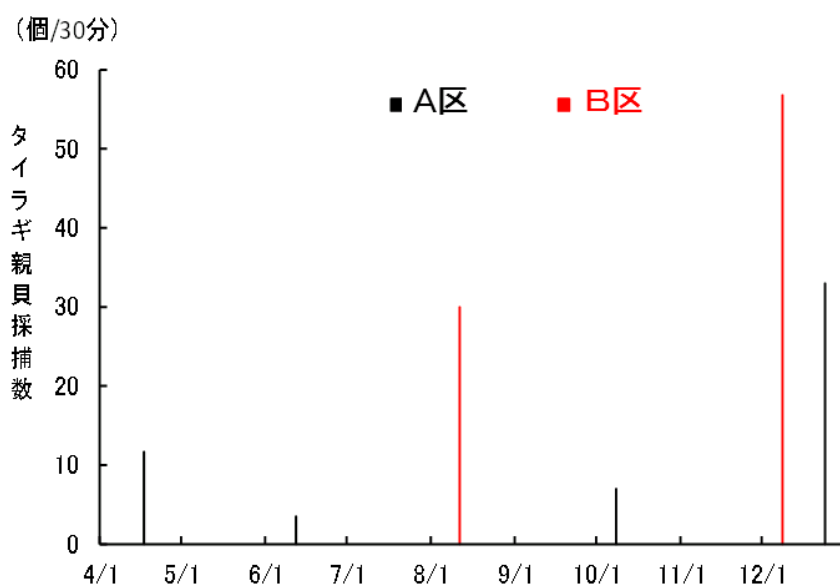


図2 A 1 海域東部における徒取り漁法によるタイラギ親貝採捕数

(殻長 150 mm以上)

出典：福岡県，佐賀県，長崎県，水産総合研究センター（2014）「平成26年度二枚貝資源緊急増殖対策事業成果報告書」

2014年12月8日にB区で採捕されたタイラギの殻長組成を図3に示した。平均殻長は 202 ± 16.5 mm、195 mm、220 mmにモードがみられ、1～3歳貝中心の組成であると推定された。後述するように、1990年代以降A3およびA4海域のタイラギは1歳貝のみの分布である。A1海域のタイラギは資源量こそ少ないものの、大型の個体が多く生息していることが分かる。

② 要因の考察

漁獲量や資源量の長期的な推移が不明であるため、問題の特定に至らなかった。

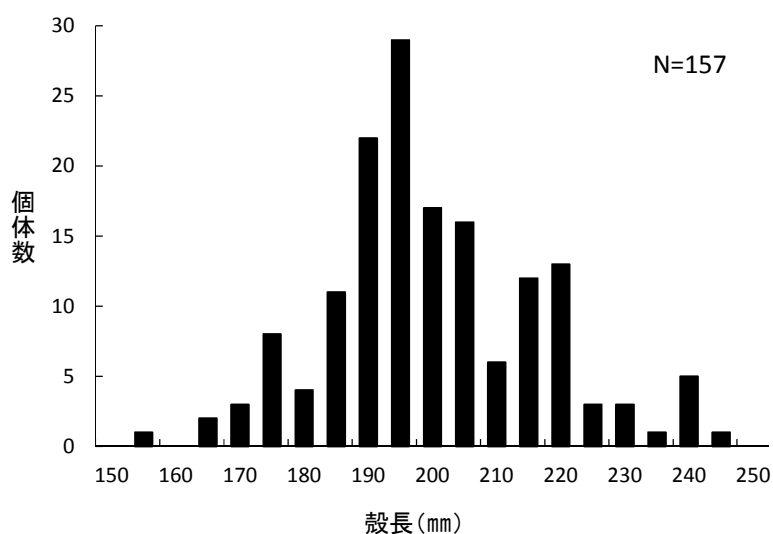


図 3 干潟で採捕されたタイラギの殻長組成

出典： 福岡県，佐賀県，長崎県，水産総合研究センター（2014）「平成 26 年度二枚貝資源緊急増殖対策事業成果報告書」

2 サルボウ

① 現状と問題点の特定

A 1 海域はサルボウ資源の生息域であるとともに、粗放的な採苗（海底に採苗器を設置して稚貝の着生を促進）と着生稚貝の移植技術を組み合わせた漁業が行われている。A 1 沿岸においては、1970 年代初頭に約 1 万 4 千 t の漁獲量があったが、その後、へい死（原因は不明、岡山水試ほか 1988）が発生して漁獲量が激減した。へい死は 1985 年を境に収束し、佐賀県での生産量は 1 万 t 台に回復した。しかしながら、近年の生産量は減少傾向にあり、変動幅も大きい。

② 要因の考察

A 1 海域西部はサルボウ漁場として利用されている。水深がやや深い干潟沖合域において大量死などによる資源変動が大きいことから、ここでは、干潟沖合域におけるサルボウ資源量の変動要因について考察する。この海域の資源変動要因としては、貧酸素水塊、ナルトビエイの食害などが挙げられる。

A 1 海域の干潟沖合域では、2001 年以降の毎年、夏季に貧酸素水塊が発生している。本海域の浜川沖（定点 T14）では、貧酸素の継続と共にサルボウのへい死が生じている（図 4）。サルボウは二枚貝の中でもヘモグロビン系の体液を保有するなど、低酸素環境下でも生残できる特性を有した二枚貝のひとつであり、貧酸素が頻発する海域にある程度適応した生物でもある。サルボウは無酸素水中で 9 日間生残するという知見があるものの（中村ら 1997）、有明海では無酸素状態は小潮期の数日程度しか継続しないことから、貧酸素化にともなった底質中の硫化水素の増加等がへい死を引き起こして

いるという報告がある（岡村ら 2010）。貧酸素化に加えた硫化水素の発生がサルボウの生残をより低下させることは、室内実験によっても確認されている（図 5 および中村ら 1997）。

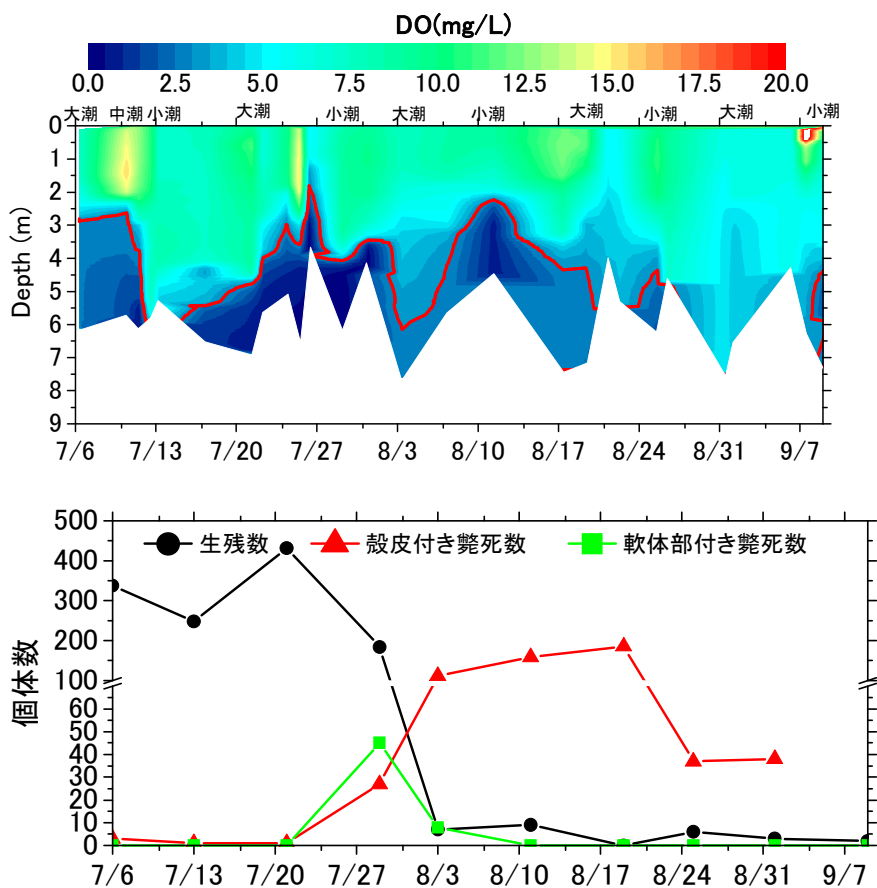


図 4 A1 海域浜川沖 (T14) における溶存酸素濃度分布とサルボウ生息状況の変動 (2012 年)

出典：水産総合研究センターによる調査結果を整理

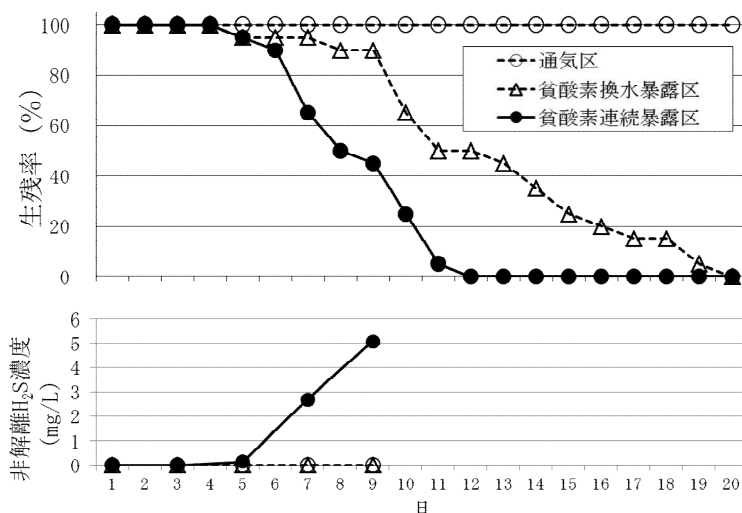


図 5 サルボウの貧酸素暴露実験結果（佐賀県有明水産振興センター提供資料）。通気区は溶存酸素濃度 5mg/L 以上、貧酸素水暴露区は毎日 1 回、溶存酸素濃度 1mg/L 未満の貧酸素海水で飼育水を全交換した。

出典：中牟田・吉田（2014）佐賀県有明水産振興センター研究報告第 27 号，p. 27-33

A1 海域のサルボウ資源に対しても、ナルトビエイによる食害が発生していると推定され、資源減少の要因になっていると考えられる。ただし、ナルトビエイの胃内容物は海域毎に精査されていないため、その捕食圧を海域毎に推定することは困難である。

3 アサリ

A1 海域は東部と西部で底質環境が異なっており、六角川筋を境に西側が泥質干潟、東側が砂泥質干潟に区分される。アサリは泥質干潟にはほとんど生息できないため、A1 海域におけるアサリの主要生息域は、東部（六角川筋から福岡県大牟田地先まで）に限られている。西部の泥質干潟でも地盤高が高く底質が固い場所（鹿島市沖や糸枝川河口）にごく小規模なアサリ漁場が形成されているが、ここでは主に A1 海域東部のアサリ資源状態について詳述する。

なお、A1 海域では、覆砂が実施されて人為的に底質が変化していることに留意する必要がある（図 6）。

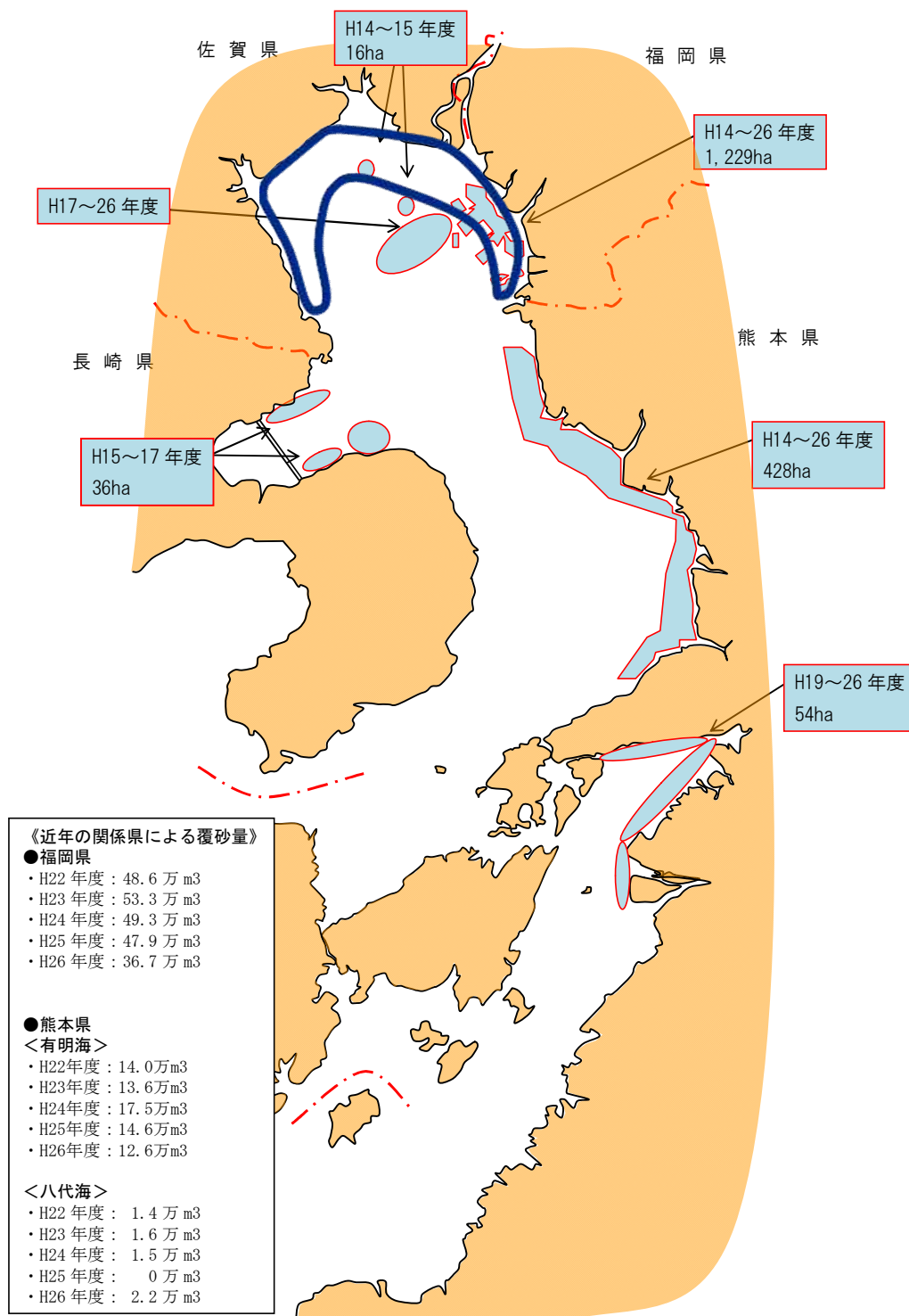


図 6 A 1 海域における覆砂実施エリア
(関係県の整備実績をもとに水産庁において作成)

① 現状と問題点の特定

アサリはA1海域で1970年代半ばから10年間ほど、年に1万tを超える漁獲を記録した。特に1983年には5万8千tもの漁獲がみられた。その後減少し、2000年から2005年までは数千t以下と低迷した。2006年から2008年にかけて資源が一時的に回復し、2006年の漁獲量は6千tに達した(図7)。しかしながら、2009年以降資源の凋落傾向が明瞭となり、現在は過去最低レベルの漁獲量に留まっている。

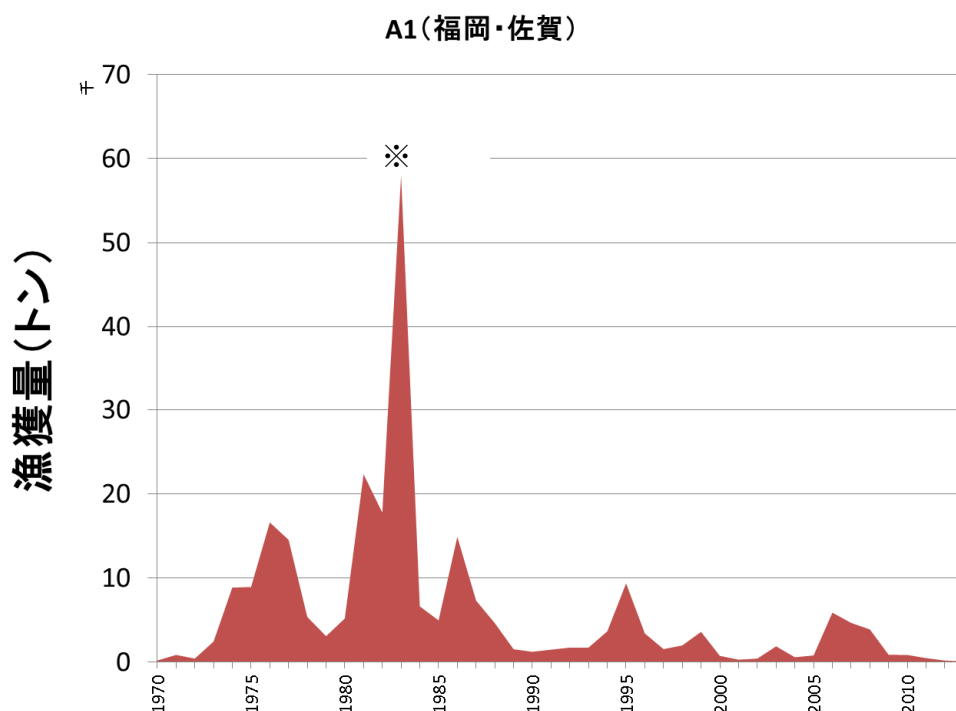


図7 A1海域のアサリ漁獲量の推移

(昭和45～平成25年農林水産統計より環境省が作図した)

※ 1982年から1984年にかけての漁獲量の大幅な増大については、例年では漁獲があまりみられない「峰の洲」(A2海域に該当)と呼ばれる海域で漁獲がみられたためである。

② 要因の考察

A1海域の漁獲圧に関しては、漁具漁法がA4海域とほぼ同一であるため、A4海域同様に、1980年代には大きな漁獲圧が生じたことが推定される。しかし、資源量に対する漁獲圧の経時的なデータは乏しい状況で、正確なデータは存在しない。2003年以降は資源が回復基調に入り、2006年には比較的高い生産状況に至った。実際に資源量を推定した結果によっても、2005年から2007年にかけて

てA1海域のアサリ資源が急速に回復していた（図8

図7 A1海域のアサリ漁獲量の推移）。この理由については不明であるが、資源の動向が後述するA4海域と類似の傾向を示している。

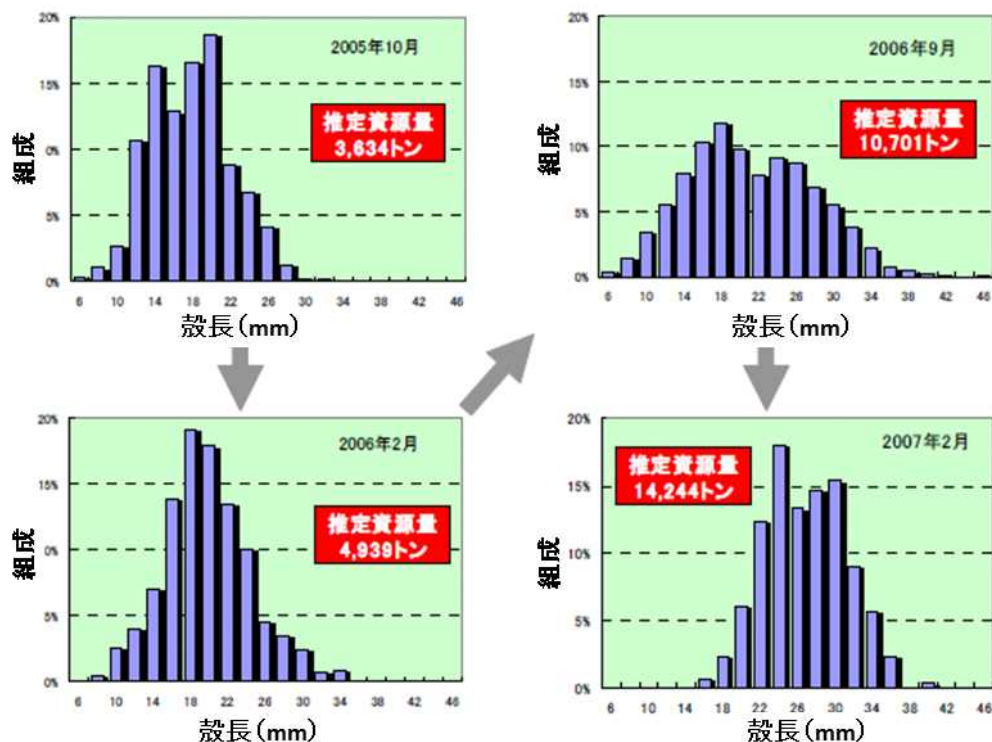


図8 A1海域のうち福岡県海域における2005年～2007年にかけてのアサリ推定資源量の推移

出典：有明海・八代海総合調査評価委員会（第27回）
資料4-3 福岡県有明海地先における覆砂事業の効果

食害について、A1海域においてもナルトビエイは度々出現していることから、これらによる食害は、近年のアサリ資源の減少の一因と考えられる（後述）。

資源管理について、浮遊幼生や着底稚貝の量が低位で推移している中で資源管理方法が確立されていない。

有害赤潮による影響に関しては、アサリ漁場が分布するA1海域の東部においては、シャットネラ赤潮の発生頻度が低く、かつ細胞密度も高くない。シャットネラはアサリのろ水活動を顕著に阻害するものの、赤潮密度でのへい死等は室内試験によっても確認されていない。よって、シャットネラ赤潮の増大が直接アサリ資源に影響している可能性は考えにくい。

《まとめ》

サルボウについては、夏季の貧酸素の継続とともにへい死が生じている。貧酸素化に伴った底質中の硫化水素の増加等がへい死を引き起こしているという報告がある。

アサリについては、浮遊幼生や着底稚貝の量が低位で推移している中での資源管理方法が確立されていない。（底質の泥化について、海域小委員会資料4-1の8ページ参照。）

ナルトビエイによる食害について、有明海全域における二枚貝全体の漁獲量に対する食害量の割合を試算すると、平成21年は4割弱と最も大きかったが、近年7年間の平均では2割弱であった。